



「結局、なかったみたいね？」

「なかったね～。でも、にゃんこちゃんが赤ちゃんをいつの間にか産んでいたのは見つけたよ～」

「うん、子供産んでたんだよね。これはちょっと、福珠さんに相談しないとだね」

「どうして～？ にゃんこ増えたんですよ～、かわいかったよ～」

「バカだな、いくらお屋敷でも、そうそう福寿さんや、まして大姐さまが許可してくれるとは限らないでしょ」

「え～、つばきちゃんそうかな～。そうです？ 春花姐さま～」

納屋の出口で待っていたつばきとそんな会話をするひなぎく。

後ろをついて納屋を出た春花は、ひなぎくたちの持つ手燭が仄明るくする土間で、片腕を抱いて指を頬に寄せる。

「う～ん、二匹くらいなら別にいいんじゃない？ でも、親離れするまでだけね。一人前の大きさになったら、その猫たちはその猫たちで頑張ってる生きてもらいますからね」

「おお、だってさ」

「ふええ～い」

二人の若女中が遣り取りするのを聞いて、仁美が脇の雪絵の背中をバンツと叩いた。

「だとき！ しっかりしなきゃね、私たちも」

「？ どういう意味？」

「たどってヤツだよ。……あー、雪絵には今度、比喻や暗喩ってモノを詳しく教えてあげるよ」

その口ぶりから、今すぐ述べられる簡単な内容の事柄ではないのが、雪絵も察しがついたので、頷いて返すに留めた。しかし、仁美が話を振ってくれたお

第三章 太刀の六

蔭で、今の自分たちに対して春花が何かの意味合いを含めたことを言ったのだ、
というは何となく分かった。

「ま、とは言っても、今回のチョコレート紛失事件に関しては、人の手を借り
てでも、自分たちの出来る限りのことをしたうえで、見切るなりなんなりし
ないとき。半人前には半人前に出来ることをね」

「うん、そうだね」

納屋の引き戸を元の少し空かした状態まで音を立てて閉めて、雪絵は土間を
進む。背後で、甘えるような小さな猫の鳴き声が聴こえた。

「思ったより落ち込んでないわね、雪絵。母さんはしょんぼりするあなたの顔
も、ちょっと視てみたい気がしたんだけどね」

「春花さん、冗談にしては少し性格が悪いんじゃない」

「そうかしら、まあ、そうかもしれないわね。私はああいうのに、少し、苛立
ってしまう心を持っているからね」

「ああいうの？」

訝しむように首を傾げて、雪絵が春花の言葉を捉えた。春花が“苛立つ”
というのが、雪絵にも仁美にもかなり違和感というか、馴染みのない在り方に
受け取られたのだ。

それに対して、春花は胸の膨らみを抱くように腕をすぼめ、どこか彼女らし
からぬ冬の曇天を視るような重い吐息を吐いた。

「そう、ああいうの。母親が自分の産んだ子供と一つになっているの……かし
ら」

「？」

雪絵は解らない。仁美は少し顔色をおちつけて、口を噤んだ。

「仁美ちゃん辺りは密かに知っているかもしれないけれど、ちょっと話すとね、
私は自分の産んだ子がいないじゃない。それでね……」

勝手の板間にあがって、部屋へと戻っていくひなぎくとつばきたちを他所に、
春花と雪絵、仁美たちは薄暗い土間に立ち、話をする。

「春花さん……その話は、必要なこと？」

第三章 太刀の六

静かな暗がり、静かに声を出す雪絵。その声は、寒い風に吹かれる迷子のようにどこか不安気にも映った。納屋の脇の表へと続く木戸が、風にガタガタと揺れる。

「.....必要ではないわね。ただ、私の話をしているだけ。ちょっと、感傷的になったようね。私も人間だから」

「.....私は、春花さんのことを知りたいと思うけれど、その話は誰もしてくれないし、訊いてはいけないと思っていた。それに、私もあまり掘り下げたい気がしない。なんか.....ね」

だけど、と雪絵は春花の顔を視る。その黒い瞳に映る女性は、美しいのに、どこか寂し気で、それがなおさら雪絵を気が進まない思いにさせる。

「だけど、今それを、春花さんが話してくれるの？」

「雪絵は聞きたい？ 私のカッコ悪い話」

「カッコ悪い？ 春花さんも人間なんですよ。そんなところくらいあるかも...だよ。私は気にしない」

「.....そう」

娘のそんな達観したような、悟ったような、毅然としたような口ぶりに、春花は涙袋を深める。

いつの間に、こんなことを言うことができる子になったのかしら、と少し胸が躍る。何を視て来たのか。何を感じて来たのか、この子は――と春花は我が娘の胸の内の変化を感じ取って、微笑む。少し前は、自分のことを随分理想的にしか視ていないような、そういう一面的にしか人を捉えられない節があるような子だったのにね、と可笑しくなる。

こんな風にも親を見られるようになったのか。

これが子の成長か。

そして、子の成長とは、親の知らぬ間に、いつの間にか子の身の内に生じているモノなのか。

春花はそんなことを思う。

「じゃあ、私も昔のままでいては、親としてこの子に恥ずかしいわね」

「なに？ 春花さん」

うん、と春花は首を横に振る。瞳は伏せていたが、口元が緩んでいた。

「私たちも、その処の話をしないと、いつまで経っても親子ごっこのままなのかもしれない、と思ってね。だから、少し聞いて欲しいわ、雪絵」

足を動かし、仁美が勝手を登り、二人から離れていく。

自分がいて、聞き耳を立てる類の内容ではないと察したのだろう。土間と勝手の段差の前で、春花は屋内を背に、雪絵に向き合う。

その春花の、今迄視た中でも特に真摯な眼差しに、少し雪絵も居心地の悪さを覚えて、自分の方から話を向けた。

「春花さんの……話。子供の話……だよ」

「ええ、あなたも少し気になっていたことでしょう。ほら、私ってこの一家の家長であり、組長であり、親方じゃない？ それって、ともすれば跡目といった問題を必然的に背負わないといけないじゃない」

「そう……だね」

去年の五月。夕餉の席で、珍しく酒を呑む春花が口にした言葉は、今でも憶えている。

それから今に至っても尚、自分が“そういう期待”をされていることに対して、雪絵は自分なりに向き合っているつもりだ。周囲の組員達の様々な声や表情は、時に気障りであるし、刀を振るうだけの目的の自らの生に、そういう事柄は少し過大にも感じる気持ちがあってもである。

「でもね、なら自分で攀れ合いを作って子供を産みなさいという話でね。実際のところ、私が先代から頭梁の座を継ぐときも、それは問題視されたわ」

ふう、と春花にしては気が重そうに息を吐く。そんな時の顔も、初めて視る雪絵には綺麗に見えた。

「具体的に何があったかって、それがね、色々なことを言われたわよ。私、あの頃は問題児だったからなあ」

「……問題児？ 春花さんが？」

そこは掘り下げずに口元を悪戯っぽく歪ませると、話を続ける。

「それは今も変わっていないところがあると、白峰さんは思っているし、まあその通りなんだけれどね。ほら、私って惚れっぼいから」

「そうなの……？ よく分からないけれど」

そして春花は、言い難いことを言い出す勢いが削がれたというように、獅子のたてがみのようにうねった亜麻色の髪をわしゃわしゃと搔いて、今度は乱雑に息を吐いた。

「でも、最たることと言えば、この一つに尽きたわ」

『子供が産めない女が頭になって、跡目はどうする』

「……………ってね」

そう言った春花の表情は、これもまた雪絵にとって初めてみるモノだった。「それでも、これまでの頭梁がそうであったことが多いように、跡目は必ずしも自らの子であることが求められる訳ではなかったから、白峰さんも先代も、私を庇ってくれたし応援してくれたから、今の私があるのだけれどね」

そんな風が続ける春花の表情から、彼女の心を読むことなど、機微に聡い義弟でもなしに自分に出来ることではない。雪絵は自分をそんな風に思っている節があったが、この時ばかりは、肌の奥にある敏感な……ともすれば剥き出しの心臓に針が刺さる様なチクリとした感触で、わかった。

——分かって、しまった。

涙は、ながしてはいないけれど、泣いているかのような辛い貌が、闇の中でも克明に視て取れた。

いつも微笑みを絶やさない、春の野に咲く花のような——夏の陽に向き開く花のような、温穏と、燦々とした表情が当たり前だと——坂本春花はそんな人だと雪絵は思っていた。

そして、自分でそんなことを強く思っているつもりはない春花だったが、しかし、目の前の娘が自分を鏡に映したように表情を曇らせてこういうので、否が応なく自分の気持ちを確認させられた。

「泣かないで……哀しまないで、春花さん……」

「雪絵……」

春花は胸が締まる思いで、我が子の名を口にする。

その名の子の、短いそれだけの言葉が、春花の心にある凝固した氷雪のようなモノを、雄弁に、ありありと像を結ばせ、そこを体温をもって抱き竦められるような気がした。

泣いてはいないけれど、きっと、ずっと自分はそのことを心の隅で悩み、どこかに苦しんでいるところがあったのだろうことを、春花は雪溶けの水が広がるようにゆっくりと理解した。

頭梁としての責務と、郷を治め、仕切ること。荒れくれ武俠どもを従えること。刀技において『最強』の名を守ること。自らが頭になることで背負って、それを気負い、同時に自分にとって一番大切だったかもしれないことを、どこかで見切り、しかし諦念し切れず、くすぶらせ……心の隅で負い目を感じているのだと……そうして今まで生きてきたのだと、改めて知った。

自分では、頭になることで、子を産むことは、もういいと思って、踏ん切りをつけたつもりだったのだ、春花は。

大丈夫だと、思っていた。

大丈夫だから、今まで頭梁としてやってこられたと、そう思っていた。

在位歴代二位という期間に渡って、長く頭をやってこられたのだと思っていた。

でも、その胸の内は。腹の内は、ずっと思っていたのだ。

我が子が欲しい、と。

産めれば、何かが変わるのではないか。

産めればのみが、女の生の喜びに非ずと解かっているつもりでも。

希求していた——切望していた。

真摯に思い、願っていた。

己が臓腑から歳月を経て痛みと共に産声をあげる、肉と血を分かち、智を分かち、心を分かち——想いを分かち。我が子が欲しかった。

第三章 太刀の六

自分の傷ついた身には、子供の駄々だと分かってはいたのだけれども。

ふふ、と口の中で笑う。

「だから、もしかしたら、だからこそ “視た” のかもしれないわね」

「視た？」

「獅士堂の、血刀の能力よ」

あの日に血刀が視せたヴィジョン。

雪の窓辺で産声をあげる我が子を抱く。

そんな光景。

だからあれは——春花がが欲してやまなかったモノを、だから自分の力が視たのかもしれない。春花はそう解釈する。

けれど——、と春花は自らにまつわる内面の成り立ちを解きほぐしながら、その事実に対して柔らかな笑みを浮かべる。

「けれどね、雪絵。それはもう、昔のこと」

憧れる女性の顔に浮かんだ、温かいな微笑み。

雪絵は自らもまた、その表情を変えていく。

「昔のことといっても、別に今はもう産める躰になったというわけではなくてね、私は頭となる僅かな前の抗争で腹に傷を受けてしまって、その際に子供を産む働きを殺してしまったの。毒耐性も傷に悪いように作用してね。それは今に至るも治ってはいない。……というか、治るものでもないみたいでね」

「春花さん……、それは……」

でもね、と春花は雪絵の言葉を待たず、勝手間の方に半身を向く。部屋の方からは、僅かに明かりが射している。

「でも、いいのよ。本当にね、私には終わった話というだけのこと。そういうのは、誰にもでも何かしらあるのものよ。生きていければね。それよりもね雪絵、私にはそれよりも、それと帳尻の合うとても幸せなことが起こったわ。なんだと思う？」

上体を屈めて雪絵の顔を覗き込むようにして、身を寄せてくる春花。

「……………なに？」

第三章 太刀の六

雪絵には、解からないわけではなかった。そして、そんな雪絵の心の内が、春花もまた解からないわけではなかった。

だから、銜もなく、面と向かって、面と抱きすくめて言ってやった。耳元で、甘くあまえるように、強くささやいた。息が白く広がった。

「雪絵、あなたは私の大切な宝物よ。あなたと出逢えたことで、私はずっと憧れていた母親になれたんですもの」

産まれ落ちた赤子をその手に抱くことが出来なくとも、子と愛を育み、母となることをユメ視ていた春花。

雪絵は、そんな率直な愛情を孕んだ言葉に、胸や耳や顔が次々と熱くなるのを感じて、どうしていいのか解からずに、軀に回された腕に恐る恐る手を添えた。

こちらも、はあ、と白い息が漏れる。少し熱を含んだ吐息だったかもしれない。

僅かに静まり返り、二人の息を吐く音だけが耳に届く。

しかし、荒い鼓動が欲する呼吸に、肺が冷たい空気を取り込むと、少し気が落ちつき、雪絵は嬉しさを乗り越えて気恥ずかしさを覚えた。

そして、良く分からずに口走ってしまう。

「養子というモノは考えなかったの？子供は、私で.....良かったの？」

そのセリフに何を思ったのか、春花は万力で絞るかのような腕力全開で雪絵の身を抱きしめた。

「痛いたたたっ！ ちょっと、春花さん、なに?!」

「何はこっちの台詞だわ.....」

身を引く雪絵に、春花は顔をずいと突き合わせて妙に据わった瞳で彼女をねめつけた。

そして、ふんっと顔を横に振り、横目で雪絵を見詰めて言う。

「.....まあ、それはね、本当は昔から試みていたのよ。言ったでしょ、私は惚れっぽいのよ。けれど、私のおめがねに適う器量の子で、刀技においても組員を黙らせることが出来る子となると、ね。中々難しかったのよっ」

「春花さ.....痛い痛たたたた.....っ」

もはや鯖折のような勢いで身を締め付けられる雪絵は、訳が分かるような分からないような思いで、顔を真っ赤にして息を詰まらせながら、春花の背に手を回した。

「私は、あなたがいいの。雪絵、ある懐疑論者が言ったそうよ。『人から何故彼を愛したかを問い詰められたら——それは彼が彼であったから。私が私であったからだ——そう答える以外には何も言い様がないように思う』 と。だから、そんな下らないことはもう言わないで」

「.....」

「あなたが応えてくれて、私にはあなたという子供ができたんだもの、私はあなたと出逢えて幸せよ、雪絵」

「.....春花さん」

ぐすり、と寒さの所為だけではないのだろうものを鼻ですすりながら、雪絵は春花から伝わってくるモノを改めて感じる。

——想いと、温もり。

それは、かつては知らずに、手をつけようとすらしなかったモノ。

そして今、抱きすくめることで、体温が伝わる。いや、伝えているのだと雪絵は漠と知る。

抱きしめるという行為は、シンプルだが、確かな愛情表現だ。その温もりが子に愛情を与える一つ的手段だと、春花も幼い頃に学んで知っているからこそ、今度はそれをこの子に与えられればいいな、という想いで娘を抱きしめている。

これでいいのだと、そう言われているように、互いに思った。

産めることのみならず、子を抱ける。血の繋がりよりも勝る、想いや温もりをくれる。

少しだけ、あの元気な少女と一緒に布団で眠ったことを思い出して、胸がチクリとしたけれど.....ゆっくりと、雪絵はその痛みよりも勝る想いで頷こうとして、しかし、

「もう——っ この子はこういう時でも 『母さん』 って呼んでくれないん

だから、もう——ツ」

またしてもその豪烈な刀技を繰り出す腕にあらんばかりの力を込めて、雪絵の軀を強くしめあげる春花だった。三度万力のように抱きしめあげられ、声をあげる雪絵。

「あいたたたたあつ 痛い痛いつ 春花さん、ちょ、ホント痛い、骨が、筋があああ、ちょっ 本気で勘弁して！」

「あー、この子は猫みたいに温かいわねーっ それーっ」

「更に力を入れないでよおおおおおっ」

にこにことした春花とは対照的に、本気で痛がってはあはあと息をあげている雪絵。その猫が抱きかかえられていやいやをするような様子に、春花はあまり嫌がらせても逆効果か、と仕方なく娘を開放してやった。

そして、背中や腰をさすって鼻をすする雪絵に対して、口の端をあげておかしそうに言った。

「どう？ カッコ悪い話だったでしょう。戦いで傷を受けて、その傷に苦しめられて、今でもちょっと思い出すと哀しそうにしちゃう。いい歳して子供みたくて、カッコ悪いでしょう、私」

幻滅するわよねえ、と腰に手を添えて言う春花。けれど胸を張る彼女の様子に、自分を卑下している印象は、言葉とは裏腹にない。

だから雪絵は、肯定して続けた。自分の気持ちを付け足して。

「春花さんにとってはカッコ悪い面もあるかもしれないんだろうけれど、私にとっては、カッコ悪くない。だって、春花さんほどの人でも、普通にそういうことを考えるんだって思ったら.....親近感？ が湧いたよ。今までは純粹に、ただ凄い人だと思っていたから」

「そう？」

「うん。それに.....」

「ん？」

雪絵は、自らの肚に力を入れて、一旦息を止めて、吐き出して、漸うと言う。

「私は、そのお蔭で春花さんと出逢えたんだとも言えるから、だから、カッコ

悪くても良いんだよ。私にとっては、そんな春花さんが、私と出逢ってくれて、とても……う、」

嬉しいんだよ。と呟く雪絵は、精一杯正面を向こうとして、視線を合わせられずに瞼が半ば伏せられていた。暗がりでは春花にはよく視えないが、雪絵は自らの熱をもった顔面がどんな色をしているのかと想像して、更に視線を泳がせた。

その言葉に、その様子に、春花は瞳を細めた。

「……少し余計な話が長くなったわね。指先とか体が冷えて来たわ」

「……………うん」

そうして勝手の板間にあがった春花が、思いついたように振り返った。

そして、見下ろすカタチになる下段の雪絵を見詰めて、手を差し伸べた。

「さあ、戻ろう、雪絵」

「うん」

差し出された手を躊躇いがちに取り、手を繋ぐ。

雪絵は春花と、明るみの射す部屋の方へと歩いていったのだった。

……続く。